

子どもの価値意識を生かした追究活動

Learning Activities based on Value Attitude of Child

井 上 和 夫

(大阪教育大学教育学部附属平野小学校)

はじめに

今回の学習指導要領の改訂において、「個性を生かす教育」と「基礎・基本の徹底」をどのように両立させていくかが議論の焦点となっている。社会科学学習において「個性を生かす」ということは、問題の設定から解決までを、子ども自らの意志決定によって進められることである。しかし、一人ひとりの子どもの興味・関心は異なり、追究の方向も異なることが多い。また、個人の学習活動のみでは、学習の広がりや深まりを期待できない。つまり、社会科における「基礎・基本」を十分身につけていくことは難しい。

そこで本小論文では、「学習の個性化」と「基礎・基本の習得」の両立を図って、社会科学学習における活動の具体的な構成方法を明らかにしたいと考えている。

1. テーマ設定の理由

これまでの研究の結果、一人ひとりの子どもが主体的に追究活動を進めるときは、図1のような追究活動の流れ（過程）があることが明らかになった⁽¹⁾。

社会事象に対して問いをつかみ、その問いに対する解決をもとめ、追究活動をふりかえることを通して、追究活動を連続・発展させ、自らのものの見方・考え方や社会認識を深めていくことができるのである。

この社会事象との出会いから問題解決・考察吟味までの一連の追究活動は、教師の指示・命令によって行われるのではなく、子ども自らの価値判断・意志決定に基づいて行われることが、主体的な問題解決活動が成立するうえで重要である。

本小論では一人ひとりの子どもの問いや発想の背景

にあり、自らの追究活動において「何が一番大切な」「何をすることが一番重要か」を判断したり選択したりする際に働く『価値意識』に着目した⁽²⁾⁽³⁾。そして、問題設定（つかむ段階）問題解決（もとめる段階）、考察吟味（ふりかえる段階）のそれぞれの場面において、一人ひとりが自らの価値意識を最大限に生かし、より価値のあるものを求めて主体的に追究活動を展開できるようにすることが、子どもたちの多様な個性に対応するうえで重要であると考えた。

そこで、本小論のテーマを『子どもの価値意識を生かした追究活動』と設定し、一人ひとりの子どもが自らの価値意識を生かしながら主体的に追究活動を進めていく社会科学学習のあり方を探っていくことにした。

2. 子どもの価値意識を生かした追究活動

(1) 子どもの価値意識を生かした追究活動と学習の個性化

社会科の学習では、社会事象に対してもった問いを自らの価値意識を生かしながら追究する態度や能力の育成が大切である。そして、これらの態度や能力を駆使していく過程で、社会事象に対する知識や概念を自ら獲得していくものと考えられる。すなわち、

社会事象に対して、一人ひとりの子どもが自らの価値意識を生かしながら、個性的で主体的な追究活動を行い、その過程で基礎・基本を豊かに変容させること

ができたとき、社会科における『学習の個性化』が図れると考えている。

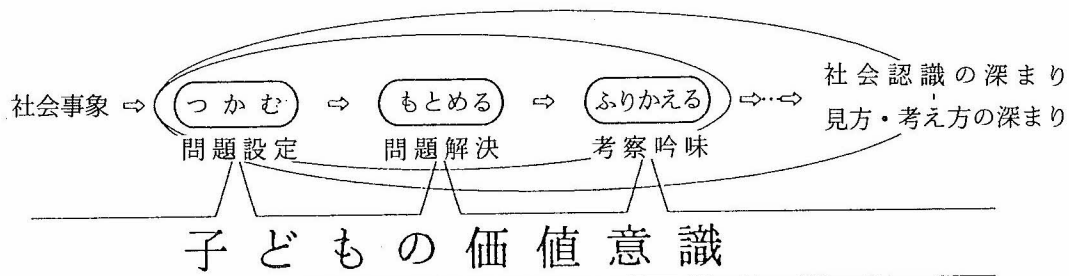


図1 追究活動の流れ

(2) 子どもの価値意識を生かした追究活動と基礎・基本

社会科学習における基礎・基本は、一人ひとりの子どもが自己を発揮しながら主体的に追究活動を進めていくなかで自ら獲得していくもの、という視点から考えることが大切である。

主体的に追究活動を進めるということは、一人ひとりの子どもが、問題設定、問題解決、考察吟味のそれぞれの場面で、自らの価値意識を最大限に生かしながら追究活動の方法を自ら決めることである。そこでは、新たな追究活動に生きて働く基礎・基本を自ら獲得していくことになる。

しかし、子どもの価値意識を生かした追究活動では自分の追究活動で一番大切にしていきたいことの判断を子ども自身に委ねるため、問題意識の醸成が十分なされていないと、社会認識や見方・考え方に浅さが見られたり、社会科の追究活動で大切にしたいことが身につかなかったりする場合も考えられる。

そこで、社会科の追究活動における基礎・基本を明確にすることによって、一人ひとりが自らの追究活動を展開しながら新たな基礎・基本を身につけるためには、どのような社会事象（資料）を提示し、どのような活動や構成をすればよいかを考えることができる。

社会科の追究活動における基礎・基本を想定していくには、これまでの研究成果である態度・能力面の育成を重視した追究活動のあり方を軸にしていくことが大切である。

一人ひとりの子どもが主体的に追究活動を進めていくうえで考えられる基礎・基本は、態度的側面、能力的側面、認識的側面の3側面から考えられ（図2）、それぞれが相互に関連し合うことによって主体的な追究活動を支えていくものであると考えている⁽⁴⁾。

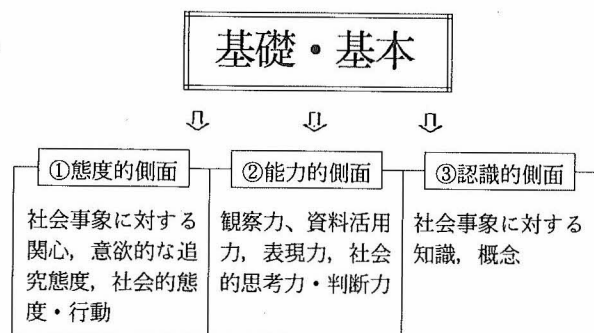


図2 社会学習の基礎・基本

(3) 子どもの価値意識を生かした追究活動の構想

社会事象と出合ったときの子どもの見方は実に個性である。また、そのときに生じる心情や意欲も多様である。この心情や意欲は問題意識に発展させる原動力となるものであるから、子どもが抱く問題意識も個

性的で多様なものとなる。一人ひとりの子どもに自己実現の喜びを味わわせるためにも、自分が調べたいことを自分が考えた方法で追究できる場、すなわち、子どもの価値意識を最大限に発揮できる場を保障していくことが望ましい。

そのための一つの試みが『追究活動の複線化』である。追究活動の複線化によって、子どもの主体性は最大限保障され、個性的な追究活動が展開されることになる。また、この場を繰り返して体験することによって価値意識は、よりよい方向、よりよい内容に向かって追究活動を推進し、子ども一人ひとりの社会認識や見方・考え方を深めていくのである⁽⁵⁾。

図1に示した追究活動の流れにおいて、子ども自身の価値意識を生かし、追究すべき学習問題、問題解決への見通し、方法、そのための資料などが、自らの意志決定により判断・選択され、また実行されてこそ、社会科学習における「学習の個性化」が図られるのである。

3. 子どもの価値意識を生かした追究活動とその指導

ここでは、追究活動の流れにしたがって、一人ひとりの自己の発揮と変容を保障する授業のあり方や指導者の支援のあり方を述べることになる。

(1) つかむ段階（問題設定の場面）

① 学習意欲を喚起する社会事象との出会い

一人ひとりの子どもが主体的に追究活動を進めていくには、社会事象との出会いを大切にしなければならない。ここでは、子どもたちが興味・関心、追究活動をもつことのできる社会事象との出合わせ方が不可欠である。

子どもに「あれ、どうしてだろう」「これまで考えていたこととちがうな」といったこれまでの学習経験や生活経験との間にズレ（矛盾）、すなわち疑問を感じさせ、不安定な思考や心の状態を安定化させようと「早く調べてみたい」「確かめてみたい」という学習意欲を高めさせるような教材の開発や資料提示の工夫が重要である。

② 交流による問題意識の醸成

社会事象との出会いから生じた疑問を学級集団で交流し、観察力、資料活用力を駆使しながら、社会事象にひそむ事実を的確に把握する。

そして、事実と事実を比較したり関連づけたりしながら、自らの学習問題が設定できるように、一人ひとりの子どもに問題意識を醸成させていくことが大切である。

問題意識が十分醸成できていないと、その後の追究活動が拡散し、その結果浅い追究活動に終始し、基礎・

基本も身につけることはできない。

したがって、ここでは学級集団で互いの価値意識の違いを受け止め合いながら個々の考えを交流し、社会事象と自分のイメージとのズレ、自分のイメージと友だちのイメージとのズレを明確にしながら問題意識を醸成していくことが大切である。そして、自らの価値意識に基づいて何を追究していくことが一番大切なかを自覚し、自分の学習問題が設定できるようにしていくのである。

(2) もとめる段階（問題解決の場面）

① 子どもの発想を生かした問題解決

ここでは、これまでに身につけた知識、観察力、資料活用力、社会的思考力・判断力などを最大限に発揮しながら意欲的に自分の追究活動ができるように支援していくことが重要である。

子ども一人ひとりの発想を生かすために、例えば、見学、聞き取り調査、資料活用など様々な解決方法の中から、自分に合った方法を自らの価値意識をもとに選択しながら問題解決を進めていくような働きかけが大切である。

もちろん、問題解決がうまくいかない子どもには、資料の提示、グループ活動などの支援をしていくが、安易に支援するのではなく、その子に応じた適切な支援をしていく必要がある。

② 子どもの個性を生かした表現活動

一人ひとりの子どもの表現の仕方は実に多様である。その多様さを認め、学級集団で生かしていくことが、学習の個性化を図るうえで重要である。自分（グループ）が調べたことを、自分（グループ）が一番表したいと思う方法で表すことを重視し、さらに表現力も高めていくことができるように支援することが大切である。

(3) ふりかえる段階（考察吟味の場面）

① 社会認識に深まりをもたせる追究活動の結果の交流

一人ひとりの追究活動も個人思考だけでは社会認識の深まりは期待できないこともある。そこで互いの追究活動の結果を交流し、問題の因果関係や社会事象の意味を共有することによって確かな概念把握をしていく必要がある。そのうえで一人ひとりが社会事象を一面的なものから、より多面的・総合的に判断し、社会的態度・行動がとれるようにしていくのである。

② 達成の満足感と新たな追究意欲をもたせる追究活動の見直し

自ら設定した学習問題を自力で解決できたとき、子どもは満足感、成就感を味わうことになる。これらは次の追究活動の原動力、すなわち新たな追究意欲とな

るもので、自らの追究活動を連続・発展させ、社会事象に対する見方・考え方を深めていくものである。

そのためには、自分の追究活動を見直す場（自己評価）が重要になってくる⁽⁶⁾。学習問題の設定、問題解決の方法など追究活動の過程で自らの価値意識に基づいて判断したことを振り返ることは、単に過去を見直すことにとどまらず、新たな追究意欲へと発展する契機となるのである。

また、わかったこと（事実）を整理することによって「～はどうしてかな」と新たな問題へと発展し、基礎・基本が深まっていくのである。

4. 子どもの価値意識を生かした追究活動の実例

(1) 中単元名 第5学年『伝統的な工業』

(2) 実践にあたって

生活が洋風化し、近代的な工業製品に満ちあふれた現代ではあるが、子どもたちの身の回りには、織物、漆器、和紙、陶磁器、木工品、人形などのように伝統的な技術を生かしてつくられた様々な工業製品がある。

しかし、事前の意識調査によると、近代的な工業でつくられた製品に比べて、伝統的な工業でつくられた製品に対する子どもたちの関心は低く、また、伝統的な工業のとらえ方も「伝統＝手作り」と短絡的な見方をしたり、近代的な工業がさかんな大阪には伝統的な工業は存在しないと考えたりしている子どもも多い。

そこで本中単元『伝統的な工業』では、大阪の伝統的な工業であり、また「伝統的工芸品産業の振興に関する法律（伝産法）」に基づき国の指定を受けている『大阪唐木指物』の教材化を図ることにした⁽⁷⁾。

そして問題設定の場面から追究活動を複線化し、一人ひとりが自らの価値意識を最大限に発揮しながら主体的な追究活動が展開できるような単元構成と活動構成を考えることにした。

(3) 指導の仮説

① 社会事象との出会いから問題意識へ

大阪唐木指物の伝統工芸士である伊藤氏が作られた飾り棚には、どっしりとした風格、彫刻の美しさがある。また、原木の唐木（紫檀）は、くぎが打ち込めないほど固く、木なのに水に沈んでしまうほど重いという不思議な木である。

これらを教室に持ち込み、大阪唐木指物の飾り棚の実物を観察したり、唐木を実際に扱ったりする体験的な活動によって、子どもたち一人ひとりに学習意欲を喚起したり、社会的思考に深まりをもたせたりしようと考えた⁽⁸⁾。

また、より確かで価値ある問題意識（基礎・基本に沿ったもの）へと高めるために、社会事象との出会い

第5学年 『伝統的な工業』指導計画

次	学 習 の 流 れ	学習活動・学習内容	主なねらい
1 ②	<p>資料提示 大阪唐木指物 指物, 唐木</p> <p>とても豪華な家具だな</p> <p>とても固い木だな</p>	<p>1 大阪唐木指物について話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・伝統的な工業製品 <p>2 大阪唐木指物の材料の唐木を試してみる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・固い木 	<p>○ 大阪唐木指物に関心を持ち、大阪唐木指物について追究しようとする意欲をもつようにする。</p>
2 ⑦	<p>大阪唐木指物はどのようにつくられているのだろう</p> <p>● こんなに固い唐木をけずるには機械を使っているのではないだろうか</p> <p>● 手作りでしているとしたらどんな道具を使っているのか</p> <p>● 飾り棚は、どのような工程でつくられているのだろう</p> <p>● 大阪唐木指物は、いつごろからつくられているのだろう</p> <p>● 飾り棚をつくるのは、どれくらいの期間がかかるのだろう</p> <p>● 大阪唐木指物は、どうして大阪でつくられるようになったのだろう</p> <p>● こんなに固い唐木は、どこから、どのようにして手にいれているのだろう</p> <p>● 大阪唐木指物のような伝統的な工業には公害のような問題点はないのだろうか</p> <p>● 大阪唐木指物をつくるための原料の種類はどれくらいあるのだろう</p> <p>など</p> <p>大阪という土地の条件を生かし、材料や道具を工夫しながら、熟練した技術で大阪唐木指物がつくられているが、後継者不足、原料の確保など、いろいろな問題点もある。また、伝統的な技術で製品をつくったり技術を守ったりするために、いろいろな努力や工夫をしているんだな</p>	<p>1. 大阪唐木指物はどういうようにつくられているのか話し合い、自分の学習計画を立てる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・原料（種類、入手先） ・工程（順序、分業） ・製品（製品、種類） ・人々の努力や工夫 ・問題点（公害） ・歴史（起源） ・地域性 など <p>2. 学習計画に基づいて追究し、結果をまとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・見学、聞き取り活動 ・図書館での資料収集 ・唐木家具調度品協同組合への問い合わせ <p>3. 追求活動の結果を交流し、深く追究する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・原料、工程、道具 ・熟練した技術 ・近代工業製品との比較 大阪唐木指物のよさ ・問題点 <ul style="list-style-type: none"> 後継者不足 販売の工夫 原料の確保 など ・人々の努力や工夫 伝産法の指定 後継者育成 	<p>○ 大阪唐木指物をつくっている人々は、材料や熟練した技術を生かして生産に努めていることを理解できるようにする。</p> <p>○ 大阪唐木指物では伝統的な技術を守るために、様々な努力をしているが、原料入手や後継者不足などの問題点があることに気づくようにするとともに、その問題点の解決に向けて、いろいろな努力や工夫をしていることを理解できるようにする。</p>
3 ⑤	<p>資料提示 伝統的工芸品地図</p> <p>他の伝統的な工業も大阪唐木指物と同じような努力や工夫をしているのだろうか</p> <p>＜予想される伝統的工芸品・産地＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ●（織 物）… 西陣織、京友禅、加賀友禅 ●（漆 器）… 輪島塗、会津塗、津軽塗 ●（和 紙）… 美濃和紙、土佐和紙、阿波和紙 ●（陶磁器）… 九谷焼、信楽焼、備前焼、有田焼 ●（木工品）… 大阪欄間、京指物、一位一刀彫 ●（人 形）… 博多人形、宮城伝統こけし など <p>日本各地にある伝統的な技術を生かした工業製品はその地域の原料や土地条件などを生かし、伝統的な優れた技術によって生産され、人々のくらしに潤いを与えているんだな</p>	<p>1. 日本各地の伝統的な工業を調べる計画を立てる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・材料・原料 ・工程の様子 ・人々の工夫や努力 <p>2. 自分が調べたい伝統的な工業を選択し、計画の視点にしたがって調べ、結果をまとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・産地との対話を通じた追究活動（手紙を出して問い合わせる、パンフレットを収集するなど） <p>3. 調べたことを交流し、伝統的な工業について自分の考えをまとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・これからの伝統的な工業のあり方 	<p>○ 我が国の伝統的な工業について、日本全国に盛んな地域がみられることや、生産される製品のもつ意味について理解できるようにするとともに、伝統的な工業について多面的・総合的な見方に基づいて自分の考えをもつようにする</p>

によって生じた疑問を、心情を大切にしながら交流する場を構成することにした。

② 追究活動の連続・発展

子どもたちが主体的に社会事象に働きかけ、自らの価値意識を生かした追究活動ができるように次の2つの場面で追究活動の複線化を図った。

<第2次>

大阪唐木指物を具体的に観察し、「大阪唐木指物はどのようにつくられているのだろう」という問題意識を共有しながら、自分の問題を追究する場。

<第3次>

「他の伝統的な工業も大阪唐木指物と同じような努力や工夫をしているのだろうか」という問題意識を共有しながら、自らの興味・関心に基づいて日本各地の伝統的な工業を追究する場。

このような子どもたちの自己を発揮した追究活動を行う場を保障することによって、自らの価値意識を生かした個性的な追究活動が展開できるようにするとともに、第2次の大阪唐木指物の追究活動で得た伝統的な工業に対する見方・考え方を基礎にして、第3次の日本各地の伝統的な工業の追究へと連続・発展していくことができると考えた。

(4) 中単元目標

- ・[態度的側面] 友だちの追究活動のよさを取り入れ、伝統的な工業やその製品に対する自分の見方・考え方を深めるようにする。
- ・[能力的側面] 我が国の伝統的な工業について、それがさかんな地域や生産物を地図や資料などで調べ、伝統的な技術を活かした工業製品のもつ意味について考えるようにする。
- ・[認識的側面] 我が国の伝統的な工業は、原料や土地の条件、技術などを生かして生産していることを理解できるようにする。

(5) 学習の流れ(全14時間)ー前頁ー

(6) 実践の概要と考察

A: 大阪唐木指物の追究活動


① 大阪唐木指物の観察(第1次1時)

本実践第1次では、まず、大阪唐木指物の飾り棚の実物を提示した。そして、大阪唐木指物が伝統的な技術でつくられたものであることを知らせた後、飾り棚をじっくり観察する活動に入った。

この活動における子どもたちの気づきをワークシートから読み取ってみると次のようになった。

実物の提示によって、子どもたちは驚きと好奇心を

細かい彫刻
きれいなつや
名前の彫り
木のおい
とても重い
丁寧なつくり



手作りのよさ
技術のすばらしさ
製作日数は?
値段が高そう
機械を使っているのでは
つくる人


もちながら、大阪唐木指物の彫刻の美しさ、どっしりとした風格などを意欲的に観察し、基礎・基本に沿った問題意識へと発展する多様なイメージや疑問を生み出している。

② 唐木を扱う体験的な活動(第1次2時)

次に唐木を実際に扱う活動を行った。唐木に釘を打つ子ども、鋸で切ろうとする子ども、彫刻刀で彫ろうとする子ども…。何とか自分の名前を彫ったり、小物を作ったりしようとするが、なかなかうまくいかない。

どの子どもも唐木の固さ、丈夫さを意外に感じ、唐木から製品に仕上げることの難しさを痛感していることがワークシートの記述からも読み取ることができる。

とても固い
少し重たい



どうしたらきれいに作れるのか
作るのが大変
機械も使っているのでは?
とても時間がかかる
この木はどこでとれるのかな

このように実物を提示し観察する活動や、唐木を実際に扱う体験的な活動の構成は、学習意欲を喚起するうえで有効であったと考えられる。

③ 交流による問題意識の醸成(第2次1・2時)

ここでは観察や体験して思ったこと・感じたことなどの心情を交流し、「こんなに固い木を使って大阪唐木指物はどのようにつくられているのだろう」という問題意識を共有しながら各自の考えを交流した。特に、「一人でつくっているのか」「分業でつくっているのか」と「手作業でつくっているのか」「機械も使っているのか」という考えが対立した。これは、これまでの製鉄業や自動車工業の学習で得た見方・考え方を転移させたり、実物の観察や唐木の体験からこれまでの先行経験がゆさぶられたりしたためだと考えられる。

このように、互いの見方・考え方が対立する交流活動を意図的に組織することによって、基礎・基本に沿った問題意識を醸成することが大切である。本実践では、表1のように一人ひとりが自分の追究すべき学習問題を設定しており、この交流の場は有効であったと考えられる。

表1 一番最初にしらべてみたいこと

原料に関するもの	10名
工程に関するもの	8名
製品に関するもの	2名
問題点に関するもの	4名
働く人の工夫や努力に関するもの	4名
歴史に関するもの	5名
地域性に関するもの	5名

[ワークシートの記述内容の分類：38名記述]

B：追究活動の連続・発展

① 大阪唐木指物の追究活動をどのようにスタートさせるか、その道筋は実に多種多様で個性的である。これらを積極的に認め、自分が調べたいことが追究できる場を保障していくこと、すなわち、追究活動の複線化を取り入れることが『学習の個性化』の指導には不可欠であると考え。しかし、自分の調べたいことだけでは、追究活動に深まりは期待できない。

そこで本実践では、一人ひとりの調べたいことの関連を板書で整理して、学級全体の追究活動の方向性を意識できるようにしたり、自分の追究活動の道筋がよく分かるようなノートづくりを取り入れたりした。

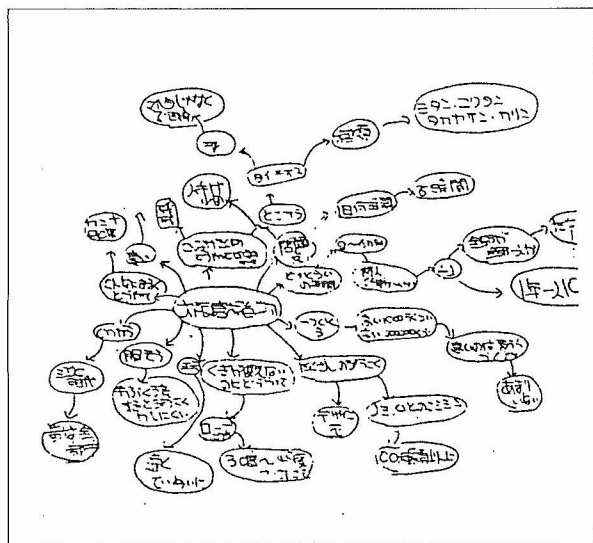


図3 A君の追究活動の道筋

このような支援によって、大阪唐木指物の追究を連続・発展させ、伝統的な工業に対する見方・考え方を深めていくことができた。図3は、A君の追究活動の道筋を表したノートであるが、原料の追究から工程、製品、歴史、問題点、人々の努力や工夫へと追究活動を連続させている。

② 日本各地の伝統的な工業の追究活動（第3次）

第2次の大阪唐木指物の追究活動の結果の交流を通して、伝統的な工業の見方・考え方を深めたが、第3次1時で『伝統的工芸品地図』の資料を提示すること

によって、「他の伝統的な工業はどうなっているのだろうか」「大阪唐木指物と同じような問題点を抱えているのだろうか」と交流し、調べたい伝統的な工業や調べる観点を決めた。

実際の見学が難しく、概念的な活動になってしまうことが考えられたので、産地にある協同組合などに手紙を出して自分の問題を解決する活動を取り入れた。また、解決活動がうまく進まない子どもに対しては、資料や情報の提示などの働きかけを適宜行った。このような支援の結果、多くの子どもたちは追究活動を自らの手で連続・発展させることができたと考えられる。

おわりに

本実践では、主に個性的で主体的な追究活動を進めていくうえでの問題設定、問題解決などの場面における教師の役割を探ってきた。

その結果、問題意識を醸成するためには実物の提示や体験的な活動を通じた交流の場が大切であること、主体的な追究活動を展開するには追究活動を複線化し、子どもの価値意識を最大限に生かす場を構成すること、基礎・基本を明確にした授業設計をし、子どもの実態を的確によみとって、効果的な働きかけや支援をすることが有効であることが明らかとなった。

今後は、子どもの価値意識を生かした追究活動における評価のあり方について研究し、さらに一人ひとりの追究活動に焦点を当てた具体的な実践を積み重ねていきたい。

【注および参考文献】

- (1) 大阪教育大学教育学部附属平野小学校「子どもが創りだす学習」東洋館出版社、1989年。
- (2) 見田宗介「価値意識の理論」弘文堂、1982年。
- (3) 細谷俊夫、奥田真丈、河野重男、今野喜清編「新教育学大事典」第一法規出版、1990年。
- (4) 河野成夫編「自己教育力育成の手引」明治図書、1985年。
- (5) 蛭谷米司「教科教育学概論」広島大学出版研究会、1981年。
- (6) 梶田勲一「真の個性教育とは」国土社、1987年。
- (7) 教材化にあたっては、伝統的工芸品産業振興協会、大阪府商工部ソフト産業振興課、大阪唐木指物協同組合、中澤唐木で作製された地図、パンフレット、VTRなどを参考・活用させて頂いた。特に伝産法（伝統的工芸品産業の振興に関する法律）の指定を受ける際の申出書には原材料、製造工程、用途、沿革など大阪唐木指物の全容が記されている。
- (8) 波多野完治、滝沢武久「子どものものの考え方」岩波書店、1963年。